

03: 夢精と、パンツと、イチゴの期待

ひとり残されたりビングで、セット売りのパンツをネットでポチる。ついでに、気になっていた小説もレビューを見ながらポチポチ。

なぜ、十枚もセットのパンツを買うのか。

それは、俺が人間としての機能が正常だということを示してもいる。

何度も言うが、俺は性欲を感じたことがない。性的興奮を感じたことがないから、二十年生きてきて自慰を一度もしたことがなかった。じゃあ、俺の作られたものはどうなるのか。

たまりすぎて、破裂する？それとも、体内に吸収される？

ノンノン！正常な身体機能の証である、俺の自動排出機能がちゃんと役割を全うしてくれているのだ。俗にいう夢精ね。もちろん、エッチな夢なんて見ない。朝起きたら、ただただぬちゃっとしている。放っておいても体が勝手に夢精で済ませてくれるので、自慰をする必要がなかった。

弊害があるとすれば、無意識化で放出されるため、週に一、二度の早朝大惨事。精通が始まって以来ずっとのことなので、仕方ない。まだ若いし。俺の無意識は勝手にお盛んなのだ。

最初のころは朝こっそり洗面所でパンツを洗うということをしていたが、家族に見つかれば揶揄い指摘されることや、洗う、絞る、こっそり乾かす、という労力にうんざりした結果、安いセット売りのパンツを買うようになった。パジャマのように、寝るときに安いパンツに履き替える。そして、夢精したときは使い捨てにすることによって、わずらわしさから解放された。安いパンツをその都度捨てることが、精神衛生面においてもいちばんコスパが良いと判断した結果だ。

西日が強くなってきた夕方。

大学の帰り道に立ち寄った本屋で、好みの本を見つけてしまった。今朝も新作をポチったばかりだったが、気になって買ってしまった。イチゴの時間までは、まだ余裕がある。どこまで読めるかワクワクしながら、俺は急いで家に帰った。

街の灯りに誘われるように繁華街へ人が流れはじめる、午後七時を少し回ったころ。

静かな部屋でページをめくる。文字が読みづらくなり、辺りが暗くなっていることによりやく気づく。本に夢中になって、すっかり時間を忘れてしまっていた。

しおりを挿み、財布とスマホとともにリュックに押し込んだ。そのまま玄関へ向かい、戸締りをしっかりして、翔一の働くバーまでの道のりはほんの少し早足になった。

バーの扉の前についたころには、すでに午後八時を過ぎていた。

扉を開くと、カランと小さく音が鳴る。カウンターにいた翔一と目が合い、トントンと端の方のカウンターを静かに叩き、俺を呼んだ。

「五目チャーハンかおにぎりセットか野菜たっぷり海苔巻き、どれがいい？」

どれもこのおしゃれなバーとは似つかわしくないメニューだが、栄養面ではしっかりと考えられたメニューだ。

「海苔巻き」

「了解」

翔一は、カウンターの奥の扉を少し開けて話をしている。たぶん中には店長の林田さんがいて、海苔巻きは林田さんが用意してくれるのだ。

このバーには軽いフードメニューもあって、仲のいい常連さんには、料理好きな林田さんがメニューにないものも作って出してくれていた。

翔一は「これは福利厚生だ」と俺の晩飯をたまに林田さんに作らせていた。ここで働いてもいない俺が翔一の福利厚生の恩恵にあずかるなんて、こんなことをしてもらっていいものか甚だ疑問ではある。しかし、しがない学生の俺は、もらえるものはありがたく何でも頂こうという精神で林田さんの優しさに甘えている。

「朔く一ん！ ご所望のキンパだよお。お肉も野菜もたあっぷり入れたから、栄養満てえ〜ん」

可愛らしく穏やかな口調とは打って変わって、筋肉ムキムキの厳つい顔のお兄さんが奥の扉を開けてやってきた。

店長の林田さんはゴリゴリの見た目ときゃぴきゃぴの言動のギャップがすごくて、たまに脳内がバグってしまう。

「ごはんしっかり食べたら、デザートにイチゴもあるからねえ。とってもおいしいイチゴだよー。はい、まずは海苔巻きちゃんをたーんとお食べっ」

俺の目の前に、きれいに切りそろえられた海苔巻きがのったお皿が差し出された。うん、おいしそう。

「いただきます」

林田さんのほうを向き、会釈しながらお礼を言う。林田さんの料理は本当においしい。味も栄養バランスも考えられていて、ワンランク上の母の味って感じた。

「きゃわ！ 朔くん、今日も可愛い！ 食べちゃいたいっ！ 撫でまわしたいっ！ 抱っこしたいっ！」

「だめですよー。節度を持って朔に接してくださいねー」

海苔巻きを口いっぱいモグモグと頬張る俺を見て、林田さんが悶えてくねくねしだしたのを見かねた翔一が、体で押しやり林田さんを俺から遠ざける。

「見てるだけだもん！ いいじゃな一い。見るぐらい一。翔くんのけちゃんぼー！ 朔くんは私の癒しなのよ一。このすさんだ街に、癒しを与えるため舞い降りた天使なんだからあん」

「はいはい。そうですね一。でも、欲望が口に出ちゃってましたからね一。危ないんで離れましょうね一」

林田さんは、本当にとってもよくしてくれている。特に食の面では、栄養が偏りがちな若者の俺たちの支えだった。それに、なぜか俺のことをとても気に入ってくれていて、聞くと、懐かない野生動物に餌付けしている感覚なのだそう。

懐かないのに何がいいのか、と思った。ちなみに、俺自身としては懐いているほうだと思う。林田さんは変な人だけど、料理はめちゃくちゃうまいし、優しいし。たぶん、俺たちにとっては親戚のお兄ちゃんみたいな存在だ。

カランと扉が開く音がした。

「こんばんは！」

晴香とその友達二人が店に入ってきた。

「は一い、いらっしゃ一い、ここどうぞ一。ごはんは食べてきた一？ なに飲む一？」

林田さんが大きな体を器用にくねくねと動かし、小首をかしげる姿を見ながら俺は淡々と残りの海苔巻きを食べた。

割と少食な俺は残り二切れほど翔一に食べてもらって、やっと食べ終わった。結構、満腹になってしまったがイチゴは別腹なので大丈夫だろう。と、腹をさすっていると、晴香と林田さんらが何やら盛り上がっていた。

「え一、ちょっと一。なに一、かわいいじゃな一い。大丈夫よ一。あなた、可愛い顔してるもの！ たぶんもう少ししたら、ちょっとした団体さんがやってくるから、その中に好みの子がいたらいいわねえ。この後来る子たちは割と健全な子が多いと思うんだけどね、それでも、初心な子が好物な変態もいるかもだから、気を付けるのよお」

晴香の友人男性の頬をなでなでしながら話している姿の林田さんが、絵面的に一番危険人物に見えてしまうので、心の中で俺は少し申し訳なく思う。とてもいい人なんだけどな。見た目がゴリゴリ過ぎて危険人物感がすごいんだよな。イチゴ、まだかな。

「晴ちゃんは最近どうなのー？ この間デートしてた子とはどうなったのー？」

「聞いてよ、リンちゃん！！ ——」

店長の林田さんはここでは「リンダさん」と呼ばれている。なので、晴香は「リンちゃん」と呼んでいるのだ。俺にも「リンダ」と呼んでほしそうにくねくねしていたが、なんだか気がのらなくて、林田さんと呼ばせてもらっている。

そんなところも懐かない野生動物感があっていいんだそう。よくわからんけど、林田さんが嬉しそうにしているから良しとしとこう。

晴香は林田さんに、つい最近付き合っただけで別れた男性について愚痴をこぼして、連れてきた友達も含めて盛り上がっていた。

晴香は恋多き男性で、あまり長続きしない。理想の王子様を探しているらしい。違うと思ったらすぐに気持ちを切り替えて次に行く。時間がもったいないのだと言っていた。「乙女の時間には限りがあるの！」と鼻息荒く力説されたことがある。

目標に向かって自分磨きの努力も惜しまず邁進する姿は尊敬しているが、別れた男性とトラブルも多々あるので少し心配だ。イチゴ、まだかな。

盛り上がっているところに水を差すのも悪いので、俺は読みかけの本をリュックから取り出し読むことにした。

この時の俺は、数分後に自分の世界が激変することになるなんて、微塵も思っていなかったんだ。ページをめくる手を止めたとき、俺も関わる新しい物語が、同時に始まろうとしていたなんて。